

帰る場所はどこにある

大分市 ^{み さわ}三澤 ^{ゆ み こ}由美子

「お母さん、今日の学校の課題でさ。」
と、唇をかむ娘。娘は言葉を改めて言った。
「私の出身地ってどこになるのかな。」

私は手に持った菜箸を一旦皿の上に置き振り返った。出身地かとおぼやきながら視線を娘から窓の外にうつす。わずかな時間考えて

「ほのちゃんが生まれたのは、大分だから大分県かなあ。」
と、その場ではそんな言葉が口をついて出てはきたものの、つき合わせたお互いの顔に鼻を抜けるようなすっきりとした納得感は浮かんでいなかった。よくよく考えると、娘にとっての出身地はどこになるのだろうか。すぐに答えが浮かばなかった。というのも、転勤族の親の元に生まれた娘はただひとつの県にとどまり生活するということをしてこなかったからだ。夕飯の支度をしていた私は出身地って何なのだろうと徐にコンロの火を消しテーブルの上にあったスマートフォンを手に取った。出身地という言葉調べると、その人が生まれ育った土地と書いてあった。ふるさとのことかなと話しながら二人で画面の文字を追った。娘が自己紹介カードに文字を走らせるその様子を眺めながら自分にとっての出身地、ふるさととは、と問いかける。

結論から言えば、私にはふるさがわかりやすく存在する。大分県の北部の山間の町で生まれ育ちそのまま県内に就職しその土地で大人になり結婚をした。私は生まれ育った土地に一貫性がありむしろ他を知らなかった。20代そこそこで結婚しのおんぴりと結婚生活を送っていたそんなある日、夫に突然転勤の通知がやってきた。住み慣れた町、温かな家族、気の置けない友人たちと離れることを考えると身体の一部が消えてしまうような気持ちになった。それでも静かに運命と受け入れ住み慣れた土地を離れた。なんとも心細い気持ちで船のデッキの上から見送りに来た両親に手を振った。そのときの光景は今でも私の網膜に焼き付いている。

新しい土地での暮らし。最初の頃は聞き慣れない言葉に馴染むためのエネルギー消費量の多さと自分の言葉がすぐに伝わらない現実に絶句し、もどかしさを感じた。街を歩く人のスピードにめまいを感じながらも必死で足を速めた。そして部屋に滑り込み玄関の扉が閉まるとホッとした。

時折、西日の差し込むリビングに寝転び窓からコンクリートの間に見える空を眺めた。そうしているとどこまでも続くふるさとの山間の空が鮮やかに目の前に広がった。胸の奥深くまで風が流れ、息を吹き返したような気持ちになった。四季折々の風の匂いも鳥のさえずりも虫の鳴き声も同時に蘇った。そしてそこにふるさとの両親の温かい笑顔が重なる。「大丈夫。なんかあったらいつでも帰っておいで。帰る場所はどこにあるんやけん。」ふるさとを離れる日、涙で目を赤くした母が私の背中をさすりながら言ってくれた言葉だった。胸が熱くなり、喉の奥がキュッと狭くなる。私はこの言葉に支えられて助けられてきたんだ。ふるさとを離れいろんな人と出会った。そして離れたからこそわかるふるさとの温かさを知った。

大分に久しぶりに帰省する飛行機の中。着陸態勢のアナウンスが流れる。飛行機の機体が傾くたびふるさとの大地と海面が太陽にあたりまぶしく光る。それがとてつもなく美しかったのを思い出す。あの瞬間はいつも子どものように胸が高鳴った。おかえりなさい。そんな声が聞こえる気がして。

「やっと終わった。」

娘の声で我に返る。課題を終えた娘がテーブルに突っ伏している。娘の出身地、ふるさととはどこと答えるのが一番しっくりくるのだろうか。今の自分にとってふるさととはどんな自分も受け入れてくれる場所。これからの自分に勇気をくれる原動力となる場所。常に自分のなかにあって自分の支えとなる場所。そんな場所が娘にもあってほしいと思った。